大学における多言語教育の利点について
—英語、ドイツ語、西洋古典語教育を例に—

高畑　時子

I. はじめに

本稿では、筆者がこれまで大学で英語、ドイツ語、西洋古典語（ラテン語と古代ギリシア語のこと。以下、ギリシア語と表記）を学び、かつ教えてきた経験、また、フランス語とイタリア語など他の外国語を独学で学んできた経験を元に、大学で多言語教育が行われる利点とその際の工夫について述べたい。

外国語を学ぶには、やはり現地へ行って、その国の言語を読んだり、話したり、聞いたりして毎日それを使うのが最も効果的であろう[1]。しかし、文法や語彙などの語学の基礎的知識なしにいきなり現地へ行っても、無駄が多いと思われる。そこで、最低限、初級文法の知識は日本国内でできるだけ得てから、機会あれば現地に赴くのが、外国語の習得にはいっそう効率がよいと思われる。大学で学生が外国語を履修する目的が、最初はたとえ単位の修得のためであったとしても、学生がコンスタントに授業に出席するうちにその言語に次第に関心を持つようになり、熱心に自宅でも学ぶようになれば高い語学力を得ることができる。また、たとえそうでなくても、授業の予習や復習を真面目にこなしてさえいれば、少なくともその言語の基礎知識は得ることができる。このようにして大学の最初の2年間の教養課程で外国語の基礎知識を学び、その後、可能であれば、例えば夏休みなどの長期休暇中に現地へ行って語学学校等に通いながら外国語学習をさらに深めつつ、実際にその言語を使用して生活すると、わずか数カ月間の滞在であっても、日常会話には困らない程度に上達するであろう。あるいは、大学生活の後半の3年次、4年次に外国語の中級や上級クラスを履修し、ネイティブ教員の授業に出席したり、その外国語を駆使したよりレベルの高いクラスに出ると、日本国内にいてもさらに外国語学習を極めることができる。しかし社会人になれば長期休暇を取ることが難しくなり、外国に駐在することを命じられたり、現地に派遣されたりするなどの機会に恵まれることなしには、外国での長期滞在をすることは困難になるので、大学生活は外国語を本格的に習得する最良の機会の一つであるともいえる。

しかし昨今では、大学におけるギリシア語、ラテン語といった西洋古典語はおろか、ド

イツ語やフランス語などのいわゆる第二外国語の授業時間数が減らされてきており、語学の授業が徐々に軽視されている傾向にある[2]。しかし文学部の学生はもちろん、文学部以外の学生にも、これらを学びたいと思う学生は存在するし、中には初級では物足らず、中級以上にも進んで学びたいという学生も存在する。中級以上のクラスが設置されていない大学の学生であるにもかかわらずである。そこで本稿では、大学における外国語教育、特に英語を中心とする多言語教育の重要性と意義を再考したい。その際、既に4、5年も前から小学校の教育課程に採り入れられるなどして、年々ますます身近になりつつある英語教育と、それ以外の西欧諸国語教育との対比により考察したい。

II. 大学における多言語教育の利点

II. 1. 子どもを取り巻く英語教育環境の進化

日本語には、日本で生まれ育っている者であれば、毎日接することができる。ひらがな、カタカナ、漢字などを親が子どもに幼少時から教え込む必要はあるが、普通に生活をしているだけでも読み書きはともかく、話したり聞いたりすることに関しては、親や周囲が子どもに毎日話しかけてさえいれば、通常は日常生活には困らない程度には上達する[3]。

日本語でなく、現在では子どもを取り巻く環境次第では、英語にも幼少時から接することができる。ところによっては、子どもが生まれる前から既に産院で、胎教用や乳幼児用の高額な英語教材が宣伝されていたりする。英語教育に熱心な乳幼児の親も多く、そのような親は英会話を習わせるのに月数万円程度の出費を惜しまない。また、育児書には英語教育特集が組まれたり、日本語と同時に英語の学習も始められるような教材や、ゼロ歳から始める音声付英語の教材も豊富に出回っている。DVD、音楽CDなどのメディアやDSなどのゲームを利用した乳幼児向けの英語教材も沢山あり、さらにはオンラインや電話による英会話教室などもあって、親が自宅で乳幼児に英語学習させることも不可能ではない。値段も様々で、例えば「ディズニーの英語システム（DWE)」など高価なシリーズものの教材から、書店などで安価で手に入る教材まである。

また、ネイティブ講師による英語教育を売りにしている託児所、幼稚園や保育園も昨今多く、概して人気が高い。親が園と会話学校をはしごして送り迎えするよりも効率が良く、その方が親子ともにとって楽でもある。

そして、乳幼児期を経て学童期に入っても、現在ではほぼすべての小学校で既に英語教育が行われている。しかもBenesse教育研究開発センターによる「小学校英語に関する基本調査」[4]では、現在ではすでに8割の小学校で、低学年から生活科などの時間で英語教育が行われているという。

学校に限らず、VOA[5]やBBC[6]のLearning Englishというインターネットのサイトでは、

スクリプト付きの英語初学者向けの時事ニュースなどが掲載されており、インターネットで簡単に無料で現地の映像を見ながら、英語を読んだり聞いたりすることができる。またテレビやラジオ放送局のライブストリームなどでは、現地時間とほぼ同時に、現地のテレビやラジオを見たり聞いたりすることができる。

このような、その気になれば、日本国内にいても英語を無限大に学習し、マスターすることができる環境の中、今の乳幼児が大学生になる頃には、今の大学生よりも英語がさらにできるようになっているかもしれず、もしかしたら英語が第二の母国語のようになっているかもしれない。そして、現在もそうであるが、今後、彼らが大学へ入る頃には、彼らが育った環境によっては、各人に英語力の差が現在以上にますます開いてくると思われる。

II. 2. 第二外国語学習から始める英語学習

このような英語と異なり、ドイツ語やフランス語など、英語以外のいわゆる第二外国語は、殆どの学生が大学に入ってから初めて学ぶ。ドイツ語やフランス語が教育課程に採り入れられている高校もあるが、全ての高校がそうだというわけではない。ドイツ語やフランス語は、多くの学生は大学に入って一から始めるが、西洋古典語になれば、その率は高くなる。このようにほとんど大学でしか直接学ぶことができない外国語が存在するため、大学の存在がますます貴重となってくる。

ところで、大学で外国語を履修する学生の全員が、英語が堪能とは限らない[7]。大学生の英語力には大きく開きがあると、日々筆者は感じている。大学入試の際、英語のヒアリングや作文、読解能力は問われるが、英会話能力は問われない。大学へ入学したが、英会話や英文法、文章解析といった英語の能力が十分でない者、英語に限らず外国語学習そのものに苦手意識を持っている、あるいは自信のない学生でも、ラテン語やドイツ語等のような文法がはっきりした外国語を、英語の知識がなくても、大学で最初から学ぶことができる。英語の語学力は学生によって差があっても、これら英語以外のいわゆる第二外国語は、大学で初めて学ぶ者が多いため、少なくともスタート時点では語学力に差がない。その際、学生は必ずしも英語が得意でなくてもよく、どんな学生でもスタートラインは同じで、真面目に予習復習を行い、授業に出席し続ければ少なくとも基礎学力をつけることができる。特に西洋古典語の場合、明確な目的意識を持っていたり、語学学習に意欲的な学生が多いこともあり、問題なく単位取得をできるどころか、大変良い成績を修める学生が多い。また、そのような学生は概して西洋古典語の成績だけでなく、他の科目の成績も良い。逆に、他の科目の成績が芳しくない学生でも、一般的に文法が複雑で難しいとされる西洋古典語をまず第一に習得すると、他の科目も同じように熱心に取り組むようになり、

全体的に成績が向上することもある。

また、第二外国語の授業に何かの理由で出席できなかったり集中できなかったりして授業に付いて行けなくなる学生があっても、本人のやる気次第では、自宅学習などで追いつくことも不可能ではない。遅くとも小中学校から学習を開始する英語と異なり、第二外国語の学習は大学で始めることが多く、初級ではまだ授業時間数の経過が少ないため、自分が休んだ分さえ復習すれば、容易に遅れを取り戻すことができる。長期間休み、それ以前の自分が出席していた時の内容を忘れてしまっていても、本人の頑張り次第では、最初から勉強し直して授業に追いつくことも不可能ではない。学生間に学力の差が出てくるとすれば、授業への出席回数の差、勤勉な態度の差によることが多い。この、アルファベットや発音といった、全くの初歩から外国語を学べることが、英語以外の外国語を大学で学ぶことのメリットの一つであるといえる。

さらに、英語の不得意な者でも、第二外国語をある程度習得してから、または第二外国語を学びながら、それにより培った外国語の学び方に拠りつつ、英語を基礎から勉強し直すこともできる。文法面のみで言うと、例えばラテン語のような古典語は複雑であるが、明解でもあるので[8]、それと比較しつつ英語を学び直すと、英語がいっそう分かりやすく理解しやすくなるであろう。

ドイツ語、フランス語、古代ギリシア語、ラテン語といった言語は、英語よりも文法が複雑とされるが、そのうちのどれか一つでも中級程度までマスターすれば、学生は語学の学習そのものに楽しみを見出し、自信を持つようになる。そして、さらに別の言語に興味を持つようになり、自発的に他の言語も学ぶようになる者もいる。

つまり、大学で初めて学んだ外国語の学習により、語学の単位を取るという目的の達成以外にも、どんな分野であれ自主的に何かを学んでいく習慣を身につけることができるようになる可能性もある。例えば先にドイツ語やラテン語を学び、その後、これまで苦手であった英語を自主的に学び直すということもあり得る。

例えば筆者が長期留学していたドイツでは、母国語を学ぶと同時に、外国語を学ぶための一番最初の入り口として、ラテン語が教育課程に採り入れられている。ラテン語はすべての西欧諸国語の基礎と考えられているからである。生徒はまず、Grundschule 入学後の 8 歳頃という早期にラテン語の基礎を学んでから、英語やフランス語など他の言語を学ぶ。そして大学入学の際には、Latinum（ラティーヌム）や Graecum（グラエクム）といった西洋古典語の語学資格試験に合格することを義務付けている大学の文系学部もある。また、イギリスにおいても、政府は 2014 年から中国語、ラテン語、ギリシア語、フランス語、ドイツ語、スペイン語を含む六つの外国語が、小学校の必修科目となる計画を立てて

いる。

ラテン語はドイツ語やフランス語、イタリア語と文法や語彙などが似ている。例えば、ラテン語と同様、名詞に男性と女性以外に中性があるのはドイツ語だけであり、フランス語とイタリア語には中性はないが、ラテン語のように男性と女性を残している。ドイツ語は、ラテン語の特徴を現代西欧諸国語の中でもとりわけよく残している。また、フランス語やイタリア語も英語よりはラテン語に近いと言える。

このことから、英語が不得意な学生でも、大学で英語以外の言語を一から学び、それをある程度まで修得すれば、その言語の知識だけでなく、語学や学問の「学び方」も学ぶことができるため、それを英語など他の外国語の学習の際にも応用できる。

II. 3. 1. 英語の知識に基づく第二外国語（ドイツ語）学習 —英語語学力の利点

これまで英語が不得意な学生への多言語教育の長所を述べてきたが、英語の知識を十分持っており、英語力に自信のある学生にも当然メリットはある。そのような学生は、幼少時から長年学んできた英語の知識を活かして、新たな外国語を学ぶことができる。英語とその他の西欧諸国語には類似点も多いため、学生は第二外国語を学ぶ際、英語との類似点と相違点を把握することにより、その言語をより学びやすくなる。教え手は英語との共通点や相違点に留意して説明すると、英語に馴染んだ学生の注意を喚起しやすい。

ドイツ語の単語だけを取り上げても、ドイツ語には英語由来の外来語が多い。例えば名詞では Haus, Musik, Handy, Telefon, Organisation など、動詞では tanzen, telefonieren, kopieren, organisieren、形容詞では gut, lang, kalt など数多くある。また文法面でも、ドイツ語は英語とよく似ている。例えば、動詞の現在完了形は、語順や用法も若干異なるが、両言語はともに have/haben の現在人称変化＋過去分詞を使う（例：I have just finished my examination. / Ich habe gerade meine Prüfung fertig gemacht.）。ちなみに、ラテン語の現在完了では habeo（持つ）は用いられず、sum（「～である」、英語のいわゆる be 動詞に当たる）の現在人称変化＋完了分詞で表されるので英語・ドイツ語とは少し異なる。また、ドイツ語の話法の助動詞を用いた文章（例：He can play tennis. / Er kann Tennis spielen.）も同じく不定詞の語順こそ異なるが、英語とよく似ている。ラテン語の場合、英語の can に当たる部分は possum の人称変化が用いられ、助動詞の単語が英語・ドイツ語とは似ていない。このように、英語とドイツ語には似ている点が沢山ある。

英語とドイツ語は似ているため、ドイツ語を日本語に訳するよりも、英語に訳する方が早いということも、英語の知識がある強みとなる。

上に挙げた英語の例文は、簡単な文章であるので、特に英語の得意な学生でなくても気

づく点であろう。英語の得意な学生であればなおさら、真面目に授業に来て、毎回ドイツ語に真剣に取り組めば、良い成績を修めるのはよくあることである。もっとも、英語ができる学生が、ドイツ語で良い点を取るとは限らない。この場合、学生が就職活動や実習、課外活動などで授業を休みがちであったりして、当人のドイツ語に取り組む時間が単に不足している場合によることが多い。

II. 3. 2. 英語の知識に基づく第二外国語（ドイツ語）学習の際の注意点

英語の知識があればドイツ語学習はいっそう容易になるであろうが、英語とドイツ語が似ているからこそ、英語を知っているがゆえに、学生がかえって混乱する場合もある。例えば、英語の構文に引きずられて、間違ったドイツ文を書く学生もいる。それを防ぐため、教え手は英語とドイツ語の相違点をしっかり説明することが必要である。

以下に、学生が英語と混同しやすい動詞の文法の例を箇条書きで挙げる。

(1) zu 不定詞句の位置。英語は文頭に来るが、ドイツ語は文末に来る。

(2) 過去分詞の位置。英語は have に続いて来るが、ドイツ語は文末に来る。

(3) 話法の助動詞の位置。英語では不定詞は助動詞の次に来るが、ドイツ語は文末に来る。

(4) 複文における動詞の位置。英語では主語の次に動詞が来るが、ドイツ語では複文中の動詞は文末に移動する。

(5) 未来形。英語では未来形を使うが、ドイツ語では未来の意味は、動詞の現在形＋未来を表す副詞で表すことができる。

(6) 英語の進行形はドイツ語にはなく、ドイツ語では例えば現在形は現在進行形も兼ねている。

(7) 英語とドイツ語では現在完了形の用法が異なる。ドイツ語では、会話の際にはあまり遠い過去でなければ現在完了形で表すことが多い。

(8) 英語では、動詞は必ずしも文頭から 2 番目に配置される必要はないが、ドイツ語の平叙文では動詞は前から 2 番目に来る。

上に挙げた英語―ドイツ語間の動詞の相違以外にも、副詞・形容詞にも相違が挙げられる。英語の場合、副詞の意味を持たない形容詞は、副詞としては使えないが、ドイツ語は形容詞をすべて副詞的に用いることができる。例えば、英語では「良い」という意味の形容詞は good、副詞は well であるが、ドイツ語では形容詞 gut を副詞としても用いることができる。また両言語の前置詞を比較しても、冠詞の格変化がない英語と異なり、ドイツ語では同じ前置詞が用いられていても、前置詞に続く名詞の定冠詞の格変化により文の意

味が異なることなど（例えば Er ist in die Stadt. と Er ist in der Stadt.）、英語とドイツ語ではさまざまな相違点がある。

以上、学生が混同しやすい文法上の英語―ドイツ語間の相違点を挙げた。このような点などに留意して、教え手は授業中、ドイツ語は英語とは異なることを説明しておくことが必要である。

II. 4. 第二外国語の学習から、さらに別の外国語学習へ

ドイツ語やラテン語など第二外国語を、例えば授業で使用している文法書が終わるまで学び通すと、フランス語やイタリア語などそれ以外の外国語が学びやすくなる[9]。別の外国語をさらに学ぼうとする際、まだ大学へ通学中であれば、大学で開講されている別の外国語の授業に出ることもできるし、専門科目と曜日や時限が重なるなどしてその授業への継続的な出席が困難であれば、NHK の外国語教育番組や音声 CD や解答付きの参考書などを使用して、新しい外国語を独学で学ぶことも不可能ではない。その際、ドイツ語を一から学んだ時よりも、より早く学ぶことができる。すでに語学の「学び方」を修得しているからである。筆者の場合、独学であったので、学力向上度合の目安として、フランス語検定やイタリア語検定を受験するなどした。同じことは西洋古典語同士にも言える。例えばラテン語を先に学んでおくとギリシア語を学ぶのが容易となり、ギリシア語の独学も不可能ではなくなる。筆者の場合、ギリシア語の基礎文法は独学で学び、当時のギリシア語教員に個別に添削してもらい、大学のギリシア語の授業には中級クラスから出席し始めた。

このように外国語学習により修得した「学び方」は、外国語学習に限らず、学生個々人の専門分野など、他のすべての分野にも活かされうる。すなわちそれは、初歩からスタートして、勉強を持続し、徐々に込み入った内容にも取り組んでいくと、いつしか高度な内容も理解できるようになる、という学びの過程である。一つの外国語を徹底的に学ぶことにより、さまざまな知識を深めると同時に、忍耐力、持続力、集中力、知的関心も高め、培うことができる。その過程で、授業時間以外にも自主的に、外国語であろうとそれ以外であろうと何かを学び続け、それが大学卒業後も継続して行う生涯学習のきっかけになれば、大学での外国語教育は単なる語学の習得を超えた、無限大の価値を持つことになる。語学学習を深めることにより、語学力だけではなく、ひいては洞察力、思考力、さらには人間性をも高めることができるまでになれば[10]、大学の語学教育は唯一無二の価値を持つものとなる。

II. 5. 大学以外で第二外国語を学ぶことが必ずしも容易ではないこと

英語以外の外国語を大学以外で学ぶことは、どこでも可能というわけではない。大都市には、英語以外の外国語を教えるドイツ文化センター（ゲーテ・インスティトゥート）や日仏会館などのような語学学校はたいてい存在するが、全ての中小都市にそれらが存在するわけではない。また、語学学校の各種コースは曜日や時限が決まっており、学び手の仕事や育児家事等のスケジュールと必ずしも合致するわけではない。学び手のスケジュールに合わせてくれる個人レッスンは高額であり、継続しにくい。

ドイツ語、フランス語のような現代ヨーロッパ語もそうであるが、特にラテン語やギリシア語のような古典語は、大学以外で学ぶことがいっそう困難である。しかし、ギリシア語やラテン語講座はすべての大学にはなくても、ドイツ語やフランス語の授業を行う大学は多い。よって、学生は大学に通い、吸収力のある若いうちに、最低１つは英語以外の外国語を学んでおくことが望ましいと言える。

III. 大学における多言語教育の際の問題点と解決への工夫

III. 1. 外国語クラスの人数の問題

英語、ドイツ語、フランス語などの語学学校では、学生の人数は多くて１クラス 15 名程度であるが、大学の外国語授業における学生数はそれより多く、時には１クラス 4、50 名にのぼることも珍しくない。語学学校では少人数教育であるため、教師と学生が直接対話できる機会も多く、教師が学生の間違いなどをその場でチェックしたりしてくれるし、学生同士で話しているのを教師が聞いて、表現や理解度などをチェックする機会も多い。また、多くの受講生が自身で学費を払って、あるいは自ら希望して親などから学費の援助を受けて会話や語学を学ぶという目的で自主的に学校へ来ているため、語学学習へのモティベーションも積極性も高い。

これに対し、大学では単位取得のためだけに義務的に渋々参加している学生も少なからずいて、必ずしも学生全員が授業後も語学力を運用したくて出席しているわけではない。このような中では、まず学生自身にその言語を学ぶ意義というものを見出させる必要が出てくる。

まず、人数が多いことへの克服法は、特に多人数のクラスでは、授業中、教師が同じ学生に何度も当てることができないため、他のことでカバーする必要が出てくる。筆者の場合、毎回か数回に一回の頻度で、学生に課題を提出させることにしている。例えばドイツ語学習を例にとると、語学学校の授業では、たとえ初級クラスであっても学生がドイツ語で話したり聞いたりできるようになることがあっても、大学の授業では学生が優秀であるにもかかわらず、中級以上のクラスでないと、ドイツ語によるフリートーキングはしない

ことが多い（会話のクラスは初級から存在するが、学生にテキストにある決まったフレーズを話させたり、問題を解かせるにとどまり、教師と学生がドイツ語で自由な会話をすることは少ない）。それどころか、ドイツ語によるフリートーキングは中級クラスでもしないことがある。

この短所を補うため、筆者は学生に宿題を課し、ドイツ語で話させる代わりに、ドイツ文を読ませて、それについてドイツ語で作文させて提出させている。その際の文章は、基本的な文法事項を抑えた簡単な文章でよいが、皆が同じ答えになるのではなく、学生個人によって答えが異なるような自由な課題を出す。その際、学生が間違えやすい文法を使用した文章を選ぶ。例えば、昨日、自分が朝起きてから夜、寝るまでの間に行ったこと、または、夏休み中に自分が主に何を行っていたかを、現在完了形を用いてドイツ語で書け、などといったような問題を筆者は課している。これは、学生自身に語学のみならず、生活態度も考え直させる良い機会となっている。

このように課題は、ドイツ文を和訳させるより、なるべくドイツ文で作文させるものの方が望ましい。しかし、そのまま教師が添削して学生に返しても、学生はきちんと読まない可能性がある。

そこで、宿題で書かせた基本文形を使った文章を、学期中、例えば合計15行だけでも良いので、学生にとにかく暗記させたり、それがテストに出題されるなどと言って注意を喚起すると、学生の学習への真剣さが増す。ドイツ語に限らず、重要な文法項目や代表的なイディオムを含む文章を丸ごと覚えてしまうのは、効果的な語学の学習方法の一つであると言える。実際にそれを用いる時は、覚えた文章を応用して話したり書いたりすればよい。

III. 2. 学生のモティベーション向上策

語学学校へわざわざ自分の自由時間を割いて学びに来る人々と異なり、大学で外国語を学ぶ学生全員が、必ずしも最初から外国語を学ぶ意欲に満ち溢れているわけではない。進級のために嫌々出ている、という学生もいるかもしれない。このような状況での学生の外国語学習へのモティベーションの上げ方を考察したい。初級クラスでは、各種検定試験（例えば英検、独検、ゲーテ・インスティトゥートの試験など）を推奨し、可能ならば授業中でその対策法に触れ、希望者に受験を推奨するのも、学生の学習意欲を上げるには効果的である。毎年秋になると、英検や独検を受験したという学生がちらほら出てくる。

中級や上級クラスの場合、各学生にアンケートなどで希望を聞いて、教材を選ばせるのもモティベーションを上げる一策である。授業で時事問題を扱うなら、教材としては、今現在、日本でも話題になっているニュースを取り扱うと学生の関心を引きやすい。例え

ば、筆者は日本の原発事故を踏まえた、ドイツ国内における原発に関する今後の取り組みについて書いた記事を教材として授業中用いたことがある（メルケル首相が、今後、ドイツ国内の原子力発電所をゼロにするという声明を発したが、それは票集めや人気取りのために言っているのであって、実行不可能ではないか、との疑惑を述べた内容の記事であった)。その際、問題への学生の関心度は高く、学生が予習をそれまで以上に念入りに行ってきた。

また、筆者が担当したドイツ語中級クラスの場合、当初、授業でドイツの社会や政治、経済問題を報じたニュースを扱った際、難しすぎるとの声があり、どのようなテーマのニュースを読みたいかアンケートを取ったところ、8割以上の学生がサッカーなどのスポーツ、芸能ニュースなどの娯楽、童話など子ども向けの極力簡単な文章、などといった読みやすいテーマを希望した。学生の希望に応じ、それらを授業で扱うと、予習をしてくる学生が格段に増え、学生の理解度やテーマへの関心、集中力も増し、授業もそれまで以上に進めやすくなった。日本語で読んでも難しいような高度な内容を持つ文章は、学期の終わり頃、学生がドイツ語に慣れてきた頃に扱うのが良い時もある。

III. 3. 授業時間数の制限の問題

また、大学における外国語教育で問題となるのは、授業時間数がきわめて限られている場合である。例えば外国語の授業が週に1回、しかも半年間で完結してしまう場合、つまりたった半年間の、90分×15回の授業のみで一つの外国語の講座を終えねばならないような場合、授業中でできることはきわめて限られてしまい、多くの場合、語学の初歩をなぞるだけで終わってしまう。この場合、教え手の最も大きな役割とは、学生が外国語学習に慣れ、授業時間以外にも独自で外国語を学んでいくための、いわば語学学習の先鞭をつけることになる。できれば週一回の外国語の授業でも、通年の30回はあってほしいが、そうでない場合、学期が終わった後もその言語を学びたいという希望者がいれば、その学生に教師が個別で教える時もある。または、もしあればその大学の近所の語学学校や、独学で学ぶことができる教材等を紹介し、学生が独学する際、理解できない点があれば、質問を受けて答える、という形で欠点を補う。

III. 4. 授業後に外国語を用いる機会が少ないこと

語学教員仲間の間でもしばしば話題にのぼることであるが、大学でせっかく学んだ第二外国語を、大学卒業後も活用できる機会を持つ学生は、そう多くはないだろう[11]。大半が、卒業すると同時に仕事や生活などで学生時代以上に忙しくなり、学んだ外国語も忘れてしまうかもしれない。

よって、授業中、現在学んでいる外国語を、大学の中以外でも使う機会があることを教え手が積極的に紹介するか、あるいは、個々人にそのような機会を見出させるよう促すのも、学生に外国語学習への意欲を駆り立てる方法の一つと言えるだろう。例えば、ドイツ語の授業中、教え手は、サッカーファンの学生相手になら、サッカーの試合を見にドイツへ行く機会もあるかもしれないことを示唆し、芸術学専攻であるとか絵画鑑賞が趣味の学生には、ドイツにある様々な美術館やドイツの芸術家の話題をしてみるのもよい。声楽を学んでいる学生には、ドイツ語の歌を人前で歌う可能性があることを示唆する。趣味の範囲を超えて、個々人の専門分野に関する研究をドイツでさらに深めたいという学生もいるだろうし、ビジネス面で語学力を発揮し、大使館や商社、旅行会社などで将来勤務したいと希望する学生も時折存在する。このように、趣味、仕事、家庭など、どのような目的でもいいので、各学生にドイツ語を大学卒業後も活かす機会がある、またはその機会を作ろうとしたら作ることができることを提示すると、いっそう学生の学ぶ意欲をかき立てることができる。

IV. 結　語

以上述べてきた多言語教育の利点、また、その際に生じる問題点の解決に向けて努力し、試行錯誤しつつ、大学で英語を中心とした多言語教育を行うことは、大学生にとって多大に裨益すると思われる。大学における多言語教育は、英語が元々できる学生のみならず、英語に自信のない学生双方にそれぞれ有効であり、学生が英語と第二外国語を同時に学ぶ意義は十二分にある。英語と第二外国語の相違点や類似点を把握しつつ両言語を同時に学び、両言語への理解を一層深めることによる相乗効果により、どちらか片方を学ぶ場合よりも、はるかに効果的に外国語を習得できると言える。

また、語学の授業では、語学だけを教えるのではない。古代ローマの政治家キケローも修辞学著書『弁論家について』(1, 20-21; 2, 120; 3, 37 参照）において述べているように、話し手は内容にふさわしく語るべきである。つまり文章理解にも言語と内容の双方の理解が必要である。外国語の授業で、その言語の文法や日常的な基礎会話だけを学んでいても、学生は退屈に思うであろう。初級クラスのみならず、特に中級以上のクラスでは、語学に限らず、その国の文化的背景や知識、習慣などについての教育も必要とされる。例えばドイツ語の授業の場合、日本とドイツ間の言語や文化の相違や類似点などに関する考察も必要となる。

また、アメリカやイギリスなど英語圏の国々と、ヨーロッパ諸国では思想が異なる。ここに、英語以外の外国語を学ぶ意義がある。学問を専門的に学ぶ学生は、英語の文献だけ読んでいても物足りなくなり、他の国々の研究成果も知りたいと自然に思うようになるだ

ろうし、ヨーロッパ諸国のニュースは、英訳や和訳を待っていては、リアルタイムには得られない。十分な語学力を備えた者にとっては、自分自身がその国の言語を読んだり聞いたりして直接得た情報は、他者による翻訳を通じた文の意味やニュアンスの歪曲や誤解などを含まない、最も信頼するに値するものである。

学生の英語の知識をその他の外国語教育に活かす具体的な工夫と方法については、また紙面を改めて考察したい。

注

1 Kobayashi Takashi, p.123 は以下のように指摘している。„Die beste Methode eine Fremdsprache zu lernen, ist, zweifellos, dort zu leben und zu lernen, wo sie gesprochen wird.“

2 藤原三枝子 p.75 は「大学が授業時間数の削減を決定すれば外国語の十分な習得に至らないことは明らかである。ましてや授業そのものが廃止されることになれば、外国語教育の改善について考える土台を失うことになる。」と指摘し、昨今の語学授業時間数の削減傾向に警鐘を鳴らしている。

3 生後 7 カ月程度のまだ歩けない乳児でさえ、離乳食を差して「マンマ」や、父母を差して「パーパー、マーマー」などの一語を発することのできる子どももいる。1 歳前後になると、もう少し長い語「いないいないばあー」なども言えるように成長する。そしてその後、成長するに従い、発する語が、次第に二語文や三語文と長く複雑になってくる。

4 http://benesse.jp/berd/data/index.shtml#syo_eigo_tyosa 参照。

5 http://learningenglish.voanews.com/ 参照。

6 http://www.bbc.co.uk/worldservice/learningenglish/ 参照。

7 手嶋英貴 p.138 は、例えば大学の芸術学の学生には、中学や高校であまり英語を学習しておらず、基本的な文法についても知識が乏しい者が多くいることを指摘している。

8 例えばラテン語は、名詞や動詞などの語尾変化がどの言語よりもはっきりと決まっているため、語順が自由であるくらいである。韻文では、前置詞と名詞の間に主語が来たり、前置詞と名詞の語順が逆になったりすることも珍しくない。例：Arma uirumque cano, Troiae qui primus ab oris Italiam fato profugus Lauiniaque uenit litora.（Vergilius, *Aeneis*, 1.1～3）「戦争と勇者を私は歌う。この者こそ最初にトロー

イヤの海岸からイータリアへと、運命により落ち延び、ラウィーニウムの浜へとやって来たのだ。」（ウェルギリウス『アエネーイス』1巻1-3行）この例の場合、ヘクサメーター（長短短6歩格）の韻律を守るため、関係代名詞 qui が前置詞 ab と Trojae oris の間に配置されている。

9　髙山緑、金田一真澄、森泉 p.86 は、慶応大学日吉キャンパスの学生に対して行ったアンケートの結果、「複数の言語を学ぶことによって、新しい言語を学びやすくなる」との意見があったことを述べている。

10　小林喬 p.95 は、「長い人生を通して形成されていく自己教育の重要性を問われることの多い今日、教養としてだけの語学学習に止めず、限りない言語習得能力に磨きをかけ、多くの言語と文化に接していくことこそ、より大きな人間形成につながるものと思われる。」と指摘している。

11　Kobayashi Takashi, p.121 を参照。„Es braucht nicht besonders betont zu werden, daß es in Japan kaum Möglichkeit gibt, seine Fremdsprachenkenntnisse nach der Universität zu vertiefen und erweitern.“

参　考　文　献

Kobayashi Takashi, Betrachtung über die Praxis des Deutschunterrichts, *Abhandlungen der Gumma Präfektur Frauenuniversität* 1（1981）, p.121-132.

Gunske von Kolln M., Lebenslanges Lernen: Überlegungen zur didaktisch-methodischen Konzeption von Deutsch als Fremdsprache nach Englisch, 生涯学習教育研究センター年報（福島大学生涯学習教育研究センター）10（2005）, p.37-45.

小林喬、家庭の二言語併用とドイツ語教育～南チロル地方の子供の二言語併用を例として～、群馬県立女子大学紀要 3（1983）, p.85-96.

髙山緑、金田一真澄、森泉、世界の言葉とつき合うための導入教育(2)―《複言語のすすめ》による導入教育の実践と分析―、慶応義塾大学日吉紀要、ドイツ語学・文学 45（2009）, p.81-132.

手嶋英貴、芸術学生のための「ドイツ語・英語連係教育プログラム」上（概説）―京都精華大学情報館における「外国語チュートリアル」活動から、京都精華大学紀要 25（2003）, p.133-144.

藤原三枝子、甲南大学における第2外国語としてのドイツ語教育―国際言語文化センター設立10年の歩み―、Sprachwissenschaft Kyoto 4（2005）, p.75-78.